

都城市民会館の解体

社説

発売中の建築雑誌「カーサ・ブルータス」(三月号)にショッキングな特集が組まれている。

「絶滅建築」を救え 日本モダンイズムの危機。全国で消失するモダンイズム建築の紹介だが、巻頭の大型写真

は都城市民会館の全景である。大空をつかみ取るように広がった扇状の屋根。南国の光の陰影をくっきりと焼き付ける長大な梁(はり)……。

「失う」意味再考し街並み保存

だが、建物の威容にもかかわらず、「絶滅建築」への危機感を訴えるその特集が現実のものになってきた。

長峯誠市長が向市民会館の解体の意向を表明。日本モダンイズム建築の象徴がいま風前のともしびになっている。

財政難で危機感拡大

都城市民会館の存廃問題は、昨年の市総合文化ホールの開館を挟んで、市

民の間で活発に論議されてきた。それを集約するため市は市民アンケート調査を実施。「解体する」が82・9%に上り、「存続する」の15・9%を大きく上回っていた。

アンケートには「解体」「存続」の双方から財政問題、文化的価値、ホールとしての機能などをめぐってさまざまな意見が寄せられていた。

長峯市長は、最終的にはこのアンケート

の結果を重視。今後予想される財政負担や、新たな市総合文化ホールの開館などを理由に、同市民会館の「解体」を決定した。

市民の多くが「解体」を望んだ理由に、年間五千万円とされる維持管理費があったことは想像に難くない。

財政難に加え、市民会館の老朽化と新たな文化ホールの維持が「屋上屋」の印象を与えたのだろう。

四年前の市民アンケートでは条件付きを含め「存続」が過半数を占めていただけに、今回の逆転は市民にも危機感が拡大したことを示している。

「循環」思想を先取り

市民会館をめぐる市民、および関係団体を巻き込んだ論議は、市政の重要テーマを考える上で評価したい。

ただ、少し気になる点がある。公共

建築物の行方が目の前の財政論議を軸に進められ、文化的・景観的側面が後景に退けられた印象のあることだ。

周知のことだが、一九六六年開館の同市民会館は、日本に現存するモダンイズム建築の傑作と言われている。

外観の大胆さだけではない。メタボリズム(新陳代謝)という当時の先鋭的理論をベースに、時代によって建物を「成長」させる構造を採っていた。

つまり用済み後の「廃棄」という方向ではなく、現代の「循環」思想を先取りしていた側面もあるのだ。

見逃されがちだが、日本を代表するモダンイズム建築の存在が、どれだけ都城市の街並みに重厚感と彩りを添えていたことが、それが全国で姿を消していく中ではなおさらである。

もとより同市にいたずらに財政負担を求めるのではない。しかし、例えば運営を任せる指定管理者やNPO法人(特定非営利活動法人)は全国に皆無だろうか。広く市民に活用法のアイデアを募ったのだろうか……。解体するだけでも数億はかかるのである。

公共建築物の安易な解体論は、「失う」ことの痛切な感覚を鈍らせる。目の利益を追って破壊された「自然」や軽んじられる「命」のように。

街づくりに「もったいない」感覚を生かしたい。「使い捨て」時代を乗り越えようとした建物が、その風潮に無言の抗議をしているように思える。

宮崎日新聞 2007年2月25日 日曜日 第1版